

内山完造研究会報告②

内山完造の自筆文書について

内 山 籬

はじめに

1913年3月24日 田口参天堂（現参天製薬）の上海出張員として上海の地を踏む

1947年12月6日 湯恩伯將軍麾下の日僑管理処により日本へ強制送還される

内山完造は28歳から62歳まで34年8ヶ月上海に居住し、あるいは「大学目薬」の販売員として、あるいは内山書店の経営者として、在留日本人はもとより多くの中国人と日常的に接触し、その生活の中で感得したこと、発見したことをほぼ毎日ノートに記していた。

これらのノート（完造は“日記”あるいは“雑記”と称していた）は積み重ねると背丈ほどの量になったという。それをもとに、参天堂田口謙吉社長、京都教会牧野虎次牧師らに上海通信として活動報告を書き送っていた。しかし1947年日本へ強制帰国させられた際に、これらノートをはじめ持ち物一切を携行することが許されなかった。

その後1949年末から一年を費やし、自伝『花甲録』（岩波書店1960）を執筆したが、その元になるべきノートがないので、市販の日本歴史年表を参考に自分の記憶を呼び起こしながら書き進めたと『花甲録』の後記にある。

『花甲録』は自身の誕生から還暦をむかえた1945年までの60年間の記録であり、日本歴史年表の記事をもとに年ごとに時系列で書かれた自伝である。

以下には、現在私達が見ることのできる内山完造の自筆文書を大きく3種類に分けて、概説を試みる。

自筆文書の概説

(1) 「上海内山通信」1925年1月5日～11月20日 45通

2006年2月に参天製薬本社倉庫で発見され、井原市先人顕彰会に提供されたもの。参天堂上海出張員としての業務報告を内容とする書簡。高網博文氏により解説公表（『内山完造の新史料——「大正一四年上海内山通信」』日本大学通信教育部通信教育研究所紀要21号2008.3）

「上海内山通信（1925年1月5日～11月20日）」は一年弱の業務報告である。内容は「大学目薬」などの薬品について、上海、漢口など中国各地の薬局での具体的な数量を記した販売、受注状況を報告する書簡形式（いわゆる候文）の業務報告である。おそらくは1913年上海到着その日から1930年正式に退職するまで毎日のように投函していたと思われるが、参天製薬では、戦争中ほとんどの資料が消失してしまい、この1925年の通信のみが残っているとのことである。

この年には軍閥同士の抗争の舞台が上海へも及び、また日本の紡績会社内外綿の労働争議が五三〇運動へと抗日運動が激しさを増し、全上海をゆるがす大ストライキに発展してゆく状況を「上海内山通

信」は伝えている。この一年弱の「内山通信」から、上海における日本企業の経営者が中国人労働者をどのように扱っていたか、また軍閥同士の抗争による軍隊の市内への進駐と退却など、近代中国史、日中関係史の重要な場面を垣間見ることができる。

(2) 書簡、原稿

(2-1) 書簡

内山完造は1913年3月参天堂上海出張員として、上海での生活の第一歩を踏み出して後、参天堂本社への業務報告のほかに、恩人として尊敬する田口謙吉参天堂社長と京都教会の牧野虎次、伊藤勝義牧師らに毎日のようにその生活体験を書き送っていた(『花甲録』p 55, p 81)というが、現在その内容を知ることにはできない。

ただ、1935年東京内山書店が誕生して以降、二つの内山書店間の通信や私信は一部残っている。

(2-2) 原稿

内山完造には上海在留時期に『生ける支那の姿』(改造社1935)をはじめ『上海漫語』(改造社1938)など6冊、帰国後に『花甲録』など8冊の著書に加え、多数の新聞、雑誌に発表された文章がある。

保存されている資料中には、原稿用紙に書かれた、新聞、雑誌、書籍などに発表されたと思われる原稿の束があるが、そのほとんどは帰国後のものである。

(3) 「日記、雑記、雑録」

毎日の生活の中で感じたこと、得た情報に対する自身の意見などを、他人に読まれることを意識せずに書いている点で、上記(1)(2)と大きく異なり、いわば生の自筆文書といえる。これらは書かれた時期によって、上海在留時期と帰国後との二つに分けることができる。

(3-1) 上海在留時期のノート 4冊

1947年の帰国直前に日本人が集中して居住させられていた義豊里で隣居であった牧師が、50年代初めに持ち帰り完造の元に届けた。(『花甲録』p 409)

(3-1-1) 1944年6月5日～1945年3月13日

(3-1-2) 1945年10月2日～1946年8月11日

(3-1-3) 1946年9月13日～1946年9月26日

(3-1-4) 1946年9月26日～1946年10月5日

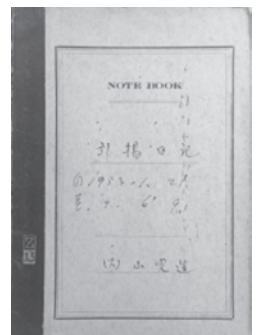
前述のようにこれらはいずれも帰国前(帰国は1947年12月6日)に上海で書かれたものの一部でしかなく、帰国後に書かれたノートの数から推しておそらくその何倍ものノートがあったはずであるが、残存するのはこの4冊のみである。それでも戦争末期の中国および日本の状況、戦後上海在留日本人の混乱と内山書店の閉鎖、接収など、完造の人生最大の転機となる体験を含め、その時々の状況を自らの感情を交えつつ書き連ねたものとなっている。

(3-2) 帰国後のノート 50冊

内山完造は1947年12月6日に拘束、そのまま12月8日出航の“ボゴタ丸”で日本へ強制帰国、12月16日未明に東京神田の内山書店に辿り着いた。完造の性癖から推して、帰国後すぐにノート記述が始まると考えられるが、現在目にすることができる帰国後部分のノートは1952年4月7日以降



(3-1-1)の最初の頁「驚異の書物」



「引揚日記」と題するノート

のもののみである。『花甲録』（岩波書店 1960）の後ろに「一九四六年より一九五九年まで」のタイトルで、日付入りの短文が完造死後マサノ夫人により 52 編追加されているが、1947 年 12 月から 1952 年 4 月の日付の分については、その基になったノート（日記、雑記）は見当たらない。直接原稿用紙に記述したのであるか。残存している原稿とノートをさらにつきあわせてみる必要があるようである。

まとめに代えて

内山完造はいわゆる“筆まめ”で、その生涯で公表、未公表を問わず数多くの短文を残した。内山完造研究会ではその現存しているもので、1960 年に出版された自伝『花甲録』と、上記（3）の自筆文書を取り上げて、内山完造の足跡を辿るという試みをしてきた。

これらの自筆文書は A5 判あるいは B5 判のノートにびっしり詰まっており、他人に読まれることを意識しておらず、それだけにその時々抱いた感情、主張したい意見を、抑えることなく吐露している。

まだ上海在留時期の部分に手をつけたばかりであるが、帰国後の部分を含めて、著述時期がすでに新聞、雑誌、出版物に発表された文章と重なるものを比較するなどの整理を進めることで、内山完造という人物の全体像をつかむことができるのではないか。